

# 経済マンスリー [オーストラリア]

## 景気後退の瀬戸際に立つ豪州経済 ～非農業部門は既にリセッション入り～

### 1. 経済動向

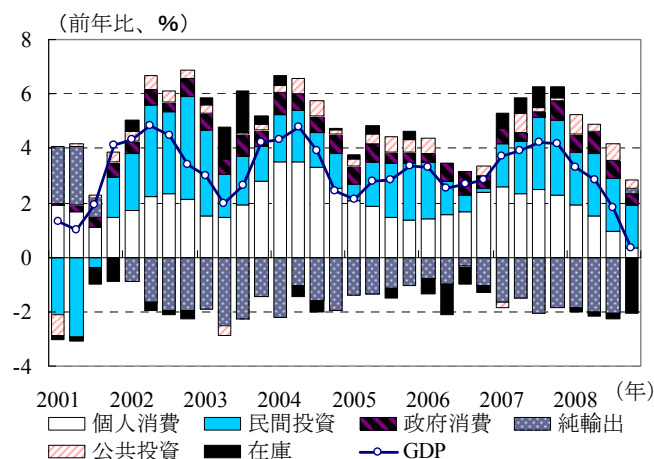
昨年第 4 四半期の  
実質 GDP 成長率は  
前期比マイナスへ

オーストラリアの昨年第 4 四半期の実質 GDP 成長率は、前期比▲0.5%と、8 年ぶりのマイナス成長となった。前年比も 0.3%と、前期（同 1.8%）から大幅に減速した。事前の市場予想は前期比プラスの維持を見込んでおり、ネガティブサプライズとなった。また、非農業部門は前期比▲0.8%と、前期（同▲0.2%）に続くマイナス成長で、既に景気後退入りしたことが確認された。17 年間の景気拡大を謳歌していたオーストラリア経済は、ここに来てリセッション入りの瀬戸際に立たされた格好だ。

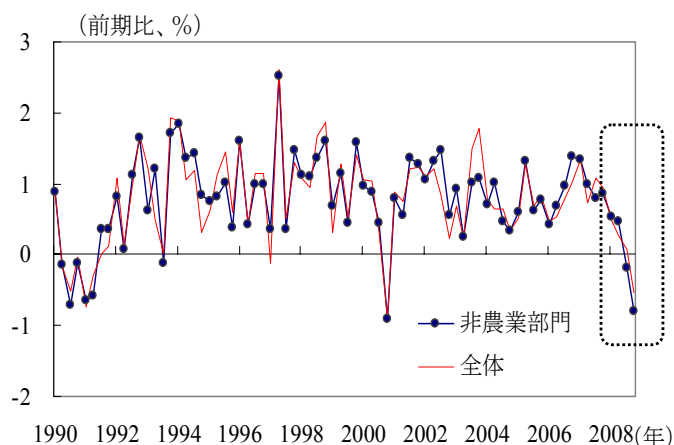
家計の貯蓄率が急  
上昇

需要項目別にみると、最も大幅なマイナス寄与を示したのは在庫投資で、国内需要の冷え込みを受け、企業が在庫調整を急いだことが窺える。また、個人消費は、前年比+0.6%と小幅な伸びにとどまった。大幅利下げや、12 月の一時金の支給などの効果から、小売売上に持ち直しの動きがあったことからみると、やや弱目の数字とも映るが、2007 年末は 0.1%であった貯蓄率が、昨年第 4 四半期は 8.5%と、前回のリセッション期並み

第 1 図：実質 GDP 成長率（前年比、需要項目別）



第 2 図：実質 GDP 成長率（前期比、部門別）



(資料) 豪州統計局より三菱東京 UFJ 銀行経済調査室作成

の水準に急上昇していることを考えると、家計の生活防衛志向が高まり、消費を抑制する動きが広がっているとみられる。一方、民間投資（同+6.7%）は、前期（同+8.0%）からやや鈍化したものの、企業の設備投資に支えられ、底堅い伸びを維持した。また、輸出は小幅減速にとどまった一方、内需の鈍化を反映し輸入が急減したため、純輸出は小幅プラスとなった。

### 先行き、調整局面が続く

先行き、豪州経済は調整局面が続こう。企業関連指標はこれから本格的に悪化する可能性が大きい。第4四半期の企業統計で、営業純益は前期比▲6.5%と、2003年以来の落ち込み幅となった。前年比では+19.6%と高い伸びを続けたが、中身をみると大半が鉱業による寄与で、その他業種はほぼマイナスとなっている。足元は好調な鉱業も、今後は世界的な需要の減少とエネルギー価格の下落が、ラグをもって影響すると予想される（注）。こうした環境下、設備投資の拡大は期待し難く、企業活動の停滞は雇用環境にも悪影響を与えよう。失業率は2月に5.2%と、前月から0.4%ポイント上昇した。雇用者数に先行する企業の求人広告件数は、2月に前年比▲55.4%と大きく低迷し、先行きの更なる悪化を示唆している。足元はプラス寄与の純輸出も、今後は輸出の鈍化により、マイナス寄与に転じる可能性が大きい。

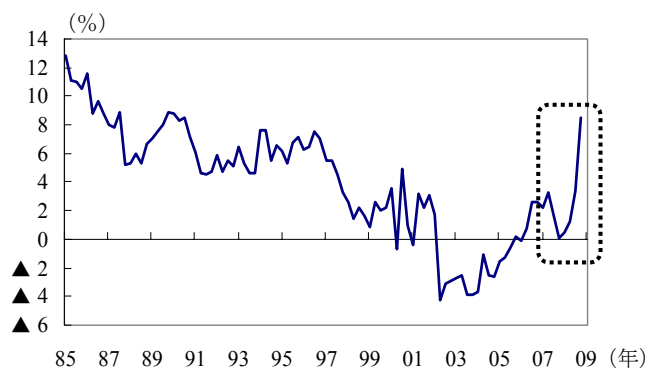
### 底支えの材料は大幅利下げと大型景気対策

こうしたなか、期待されるのは利下げと大型景気対策の効果である。景気対策の一時金は、12月に続き3月以降も支給される予定で、個人消費を支えることが見込まれる。また、公共投資も雇用の拡大など、裾野の広い波及が期待される。経済の先行きを見極めるためには、景気対策の進捗状況を注視する必要があるだろう。

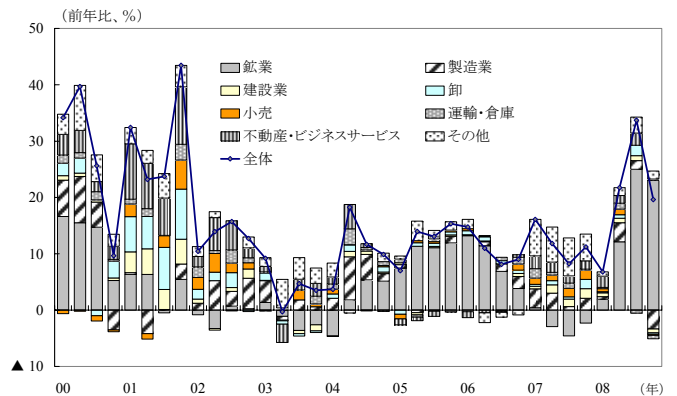
### 景気反転のタイミング：資源需要国の動向を注視

景気反転のタイミングは、世界景気の回復に伴う資源需要の高まりを待つことになる。この点、大口の資源需要国である中国、日本の動向に注目しておく必要があるだろう。

第3図：家計貯蓄率の推移



第4図：企業営業純益の推移



(資料) 豪州統計局より三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

(注) 鉄鉱石の輸出価格は、大規模輸出、いわゆるバルク輸出契約で、相手国ごとに通年固定される。2008年は商品価格の高騰時の高値で更改されたため、業績が押し上げられたが、2009年の契約額は大幅減となるとみられ、今年の業績は押下げられることが予想される。

## 2. 金利動向

RBAは3月の金利を据え置き

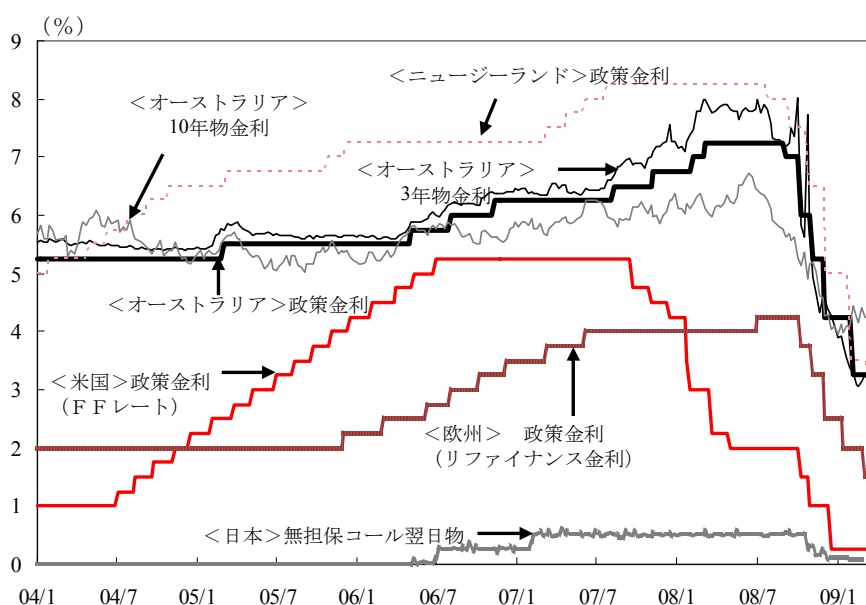
政策効果発現には今しばらく時間が必要とのスタンス

3月3日、オーストラリア準備銀行（RBA）は、政策金利（翌日物インターバンク金利であるキャッシュレートの目標値）を3.25%に据え置いた。昨年9月以降の利下げ局面で、自然休会だった1月を除き、金利を据え置いたのは、今回が初めてとなった。

RBAのステューブンス総裁は声明文で、まず、今局面で、各国は既に多様な対策を取っており、その効果が発現するまでには今しばらく時間が必要との考えを示した。その上で、オーストラリア経済も現状弱含んでおり、当面その状況が続くと見込まれるが、RBAと政府はその見通しに沿った対策を既に打ち出しており、当面の需要は既出の政策がサポートするとした。

RBAは、既に4%ポイントの利下げを実施していることもあり、政策効果を確認したい意向が強く、実際、前回の声明文では、追加利下げへの姿勢を従来よりやや後退させていた。今回の会合までに公表された指標は、その意向を変更するほど悪化しなかったことが、据え置きを後押しした。さらに、GDP統計の発表を前日に控えたタイミングで据え置くことにより、豪州経済は追加利下げを急ぐほど悪化していない、とのメッセージを市場に送ったとの見方もある。

第5図：金利動向



(資料) Bloomberg より三菱東京UFJ銀行経済調査室作

今後は小幅な利下げを行いつつ、徐々に出口を探る展開に

とはいえ、利下げ打ち止めとみるのは尚早だ。RBAは引き続き内需刺激の金融緩和に軸足をおいており、現行水準は追加利下げの余地もある。今後は小幅な利下げを行いつつ、徐々に出口を探っていく展開となろう。

こうしたなか、市場金利は政策金利の据え置きや、経済対策に伴う新規国債発行見込みなどから、このところ下げ止まっており、長期金利は足元3%、短期金利は4%近辺で推移している。今後の利下げは小刻みなものが予想されるなか、当面、横ばい圏内の動きとなろう。

### 3. 為替動向

対米ドル、狭いレンジ内での推移

豪ドルは、このところ1豪ドル=0.62~0.67ドルの比較的狭いレンジ内で推移している。2月27日、米財務省によるシティの優先株の普通株転換発表を受けドル安が進み、1豪ドル=0.65ドルまで上昇したが、その後、RBAの利下げの見通しから再び豪ドル安に振れた。さらにGDP統計で、昨年第4四半期の前期比マイナス成長が確認されたことなどから豪ドル買いの材料は乏しく、弱含んだ。13日、世界的な株価の持ち直しを受け、相対的に高金利通貨である豪ドルは上昇、足元は1豪ドル=0.66ドル台となっている。米、豪ともに冴えない経済指標が続くなか、レンジを超える方向感に欠ける状況が続いているが、下値については、概ね1豪ドル=0.6ドルが定着しつつある。ただし先行き、豪州経済が不振の度合いを強め、RBAの利下げにより高金利通貨の魅力が薄らいでいけば、下値レベルを割り込む場面も出てこよう。

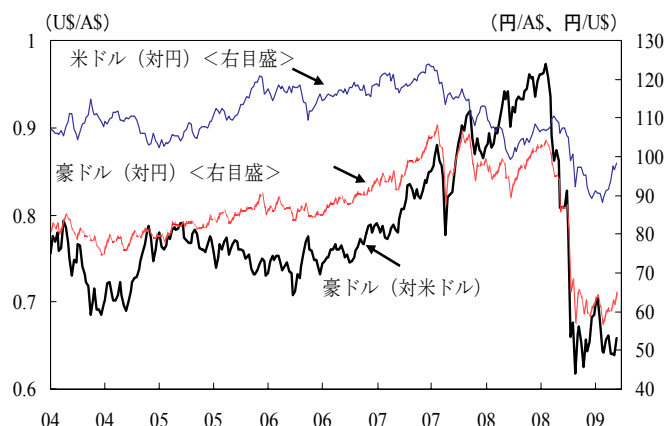
景気減速とともに下値を割り込む場面も

対円は円安傾向、ただし上昇トレンドは限定的

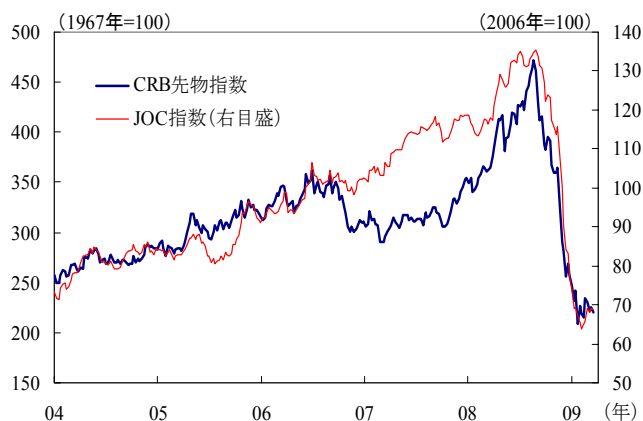
一方、対円は日本経済の不振を受け、緩やかな円安の展開となっており、足元は1豪ドル=63円台で推移している。しかし先行きについては、豪州経済も減速基調を強めていることから、豪ドル（対円）上昇トレンドは、限定的なものにとどまろう。

(中村 明、福永 雪子)

第 6 図：為替相場の推移



第 7 図：商品市況の推移



(資料) Bloomberg より三菱東京 UFJ 銀行経済調査室作成

照会先：経済調査室 (次長 佐久間) TEL:03-3240-3204

E-mail: koji\_sakuma@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願ひ申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊行ホームページ <http://www.bk.mufg.jp> でもご覧いただけます。